

戦争体験談(日赤従軍看護婦)

ひえなえ き み こ
稗苗喜美子さん

昭和 19 年 7 月 7 日、20 歳の私に兵隊さんと同じ赤紙が届き、富山の日赤に集合するように書いてあり、村の人たちにお宮さんでお見送りをしてもらいました。私の家は、女兄弟ばかりでしたので、男の兵隊さんが行かれた家の人に対して、親は肩身の狭い思いをしていましたし、何かあればぜひにと思っていたので、赤紙をもらい喜んで行きました。

日赤富山支部から 1 班 20 名の看護婦と婦長が 1 名で出発しましたが、どこへ行くのか、何をするのか全然分からない状況でした。下関で、もう日本を離れるというとき、軽い服装の南方方面へ行く人と私たちの服装が違っていたので、きっと寒いところへ行くんだろうということだけは分かりました。10 日かかって南京駅に着いたとき、初めて 1630 部隊の南京第一陸軍病院に勤務することを知らされました。駅には向こうの難民の人がゴロゴロいて、戦争とはこんなものなんだなと思いました。

それから何日かは、兵隊さんと一緒に軍規風紀の厳正と敬礼の訓練を受け、そして「親切な治療は骨肉の知情をもってせよ」つまり、自分の肉親だと思って親身に世話をするようと言われてました。

その後、私は第一陸軍病院の第 2 外科病棟に配属になりました。そこには全国からたくさんの方が来ておられ、みんなとにかく必死で働きました。今にして思えば、よく体がもったものだと思うくらいです。赤十字精神に支えられて、とにかく一生懸命。そのときは全然、命がおしくなくなり、御国のために、兵隊さんたちのためにしてあげられたらという気持ちしかありませ

んでした。

戦争が激しくなってくると、日赤の帽子も制服も白衣を国防色に染めて、動きやすいようにスカートをもんぺにしました。徐々に負傷した兵隊さんの数も増えてきて、病院に着くまでに傷口から「うじ」が湧いている人もいました。やっとでさえ痛いのに、うじでなおさら痛い。それこそ、初めてうじを見たとき、不用意にも「あっ、うじ」と言ってしまって、ジロッと軍ににらまれました。

戦争は悲惨です。絶対にくり返してはならない。人間を…戦争は人が人でなくなる。鬼にしてしまう。だから二度と、絶対に戦争を起こしてもらわねにはいかない。私には、平和の尊さも今の人たちは、何か薄れていくようなそういう認識があるような気がしてなりません。

どんなことがあっても絶対に戦争だけはしてはいけない。

戦争に正義はないそうです。今でも外国では宗教などで正義だからといって戦争が起きていますが、正当化するためだけの言葉です。

みんなが滅茶苦茶になってしまいます。

「死を競う この純情な若人に 死を競わせて 勝てるいくさか」ということを言って、それが軍の耳に入り、満州の軍の牢屋に入れられた人がいましたが、後になってこの人の言っていたことは正しかったと思います。

戦争はむごい、悲惨、そして悲しい思いをされる人がたくさん出る。大切な人を亡くしたお母さん、奥さん、子ども、恋人、その人たちの心の悲しみは他の人にはわかるはずもない。

患者さんの収容にいくとき、私のすぐ後ろの人たちが機銃掃射を浴びました。病院のすぐ後ろにハヤブサという飛行部隊があったのです。そこへ行く

ために、顔が分かるくらい敵機が低空飛行をして、わざと外れるように落とすしていく。本当に命がけでした。

内地にいるときは、兵隊さんは亡くなる時に「天皇陛下、万歳」と言っているをよく聞きましたが、私が実際に病院で見えていたら、たった1人の人だけで、あとの人は殆どが「お母さん」と言ったり、お母さん、恋人、子どもの名前を呼ぶ人ばかりでした。内地に残った遺族の人も、本当に辛い辛い断腸の想いをしておられるのです。みんな。

だからこそ、この何百万の尊い犠牲のもとに今の平和があるということを知っている人たちにも分かってほしいし、自衛隊で身を守ることも大事なことがあるけれど、絶対に、絶対に戦争はしてほしくないし、すべきではない。

毎日毎日、戦争をしているわけではないので、たまに慰問に来られる人がいました。一番楽しみにして、喜んでいた傷口も何もない人が、その日は熱が出て行けなくなってしまわれた。かわいそうでしたね。

私はかわいそうで、みんな行ってしまったけれど一緒に残ろうかと思っていたとき、軍医が来られて行ってこいと言われたので、仕方なく行きましたが本当にかわいそうでした。

病院にいるのは、ほとんどが若い若い20歳くらいの兵隊さん。亡くなったときに残しておられたものを見ると、私も帰ることはないかもしれないけれど、日本に帰ったら何とかして家族に届けてあげたいと思っていました。

結局、日本は敗けてしまったから、それができなくなりました。東京の方だったけれど、どうしておられるかなと今でも思い出します。せめて、遺族の方に最後に言われたことを聞かせてあげたかったけれど、それもできませんでした。

そして戦争はだんだんひどくなっていき、敗戦色が強くなっていきました。私が行ったときには、すでにガダルカナル島全滅の知らせを聞いてからでした。果たして、本当にこの戦争で勝つことができるのかしらと思ったけれど、みんな「勝つよ 勝つよ 必ず勝つよ 神風吹くよ そのうちに」といって神風を信じていました。というか心の支えにしていました。

だから8月15日の玉音放送も本当に信じられませんでした。その日を境に状況がガラッと変わりました。日本に無事に帰るまで、それはいつどういう目に遭うか…。私たちは特に女性なので、致死量の青酸カリを婦長さんからいただきました。まさかの時は、みんなで一緒に自決しようねと言って、髪を結って、頭のまげにピンで止めていました。私たちの部隊長になってこられた方は、千葉医大を出た軍医だったので私たちは幸せでした。人の心は一緒だからと、何かと便宜を図ってもらいました。

苦しい思いをしましたが、もっと奥地におられた方、南方に行かれた方、特にビルマ方面に行かれた方は、本当にもっと悲惨な思いをされたそうです。和歌山班の人は、ほとんど自滅になるほどでした。

若い人たちには、どれほど平和が、何ほど尊いか認識して欲しいです。

絶対に戦争はすべきではない。全ての人に深く胸に刻み込んで欲しいです。